

臨床心理学における「実験」

佐々木玲仁 *Reiji Sasaki* ©九州大学人間環境学研究院

I 「実験」のカギカッコ

本論に与えられたタイトルには、「実験」というふうに、実験ということばにカギカッコが付けられている。まずはその含意について考えることから論を起こしていこうと思う。

通常の意味での実験は、ある統制された状況を作り出し、その統制された条件の下で対照群との比較を行いつつ、ある事象についての知見を得ようとする試みである。しかし、臨床心理学において実験という言葉が用いられるとき、おおむね「臨床事例研究以外の研究法を用いた研究」という非常に広い意味を含んで用いられることが多い。また、この実験という用語には、研究としては成立しているが臨床実践とはかけ離れた「研究のための研究」であるという含みもあり、またそれは臨床状況という複雑な現象を過度に単純化し、シンプルで見栄えはいいが、臨床実践の場には還元できないものである、という含みさえある言葉でもあるといえるだろう。

上記のように広義で用いられる実験は、「非臨床研究」と言い換えることができると考えられるが、ここでカギカッコがついた「実験」というときには、「臨床場面や臨床事例は直接扱わないが、臨床実践とはかけ離れておらず、知見を臨床の場

に還元可能である」研究のことであろうと筆者は理解した。そこで、このような研究のことについて本論では論じていくことにしたい。

筆者はこのような「実験」を主な研究方法として用いて、心理臨床場面で施行される描画法（風景構成法）の研究を行っているが、筆者自身は特にこのような研究方法を用いるとき、特にデータをとる場面に関しては「実験」と呼ばずに「調査」という言い方を好んで用いている。これは、筆者が行っている描画法を対象とした研究は、特殊な実験室状況を作り出して研究する自然科学の研究よりも、未知の社会構造の解明を目指したり、既知と思われている社会や人間の振る舞いについて研究を行う人類学の研究に近いと意識しているからである。被検者を面接室に招き入れるまでは実験と変わらない手続きで行うが、面接室内で行うことには統制を加えるわけではなく、被検者の行動を観察、記録し、そのような状況で人はどのように振る舞うのかということ、人類学者が「参与しながらの観察」を行うように観察する、これが筆者のスタンスである。具体的な研究の例は後で示すとして、ここではその調査について考えていくことにしよう。

II 非臨床研究

ここで注意しておきたいのは、筆者が行っている研究はいわゆるアナログ研究とは一線を画していることである。この点は誤解されがちなので、ここで明確にしておこう。

アナログ研究とは、健常群と臨床群の連続性を仮定し、健常者における個人差と臨床的な病理の差が質的には異なっていないことを前提としている研究である（杉浦，2009）。この考え方に立てば、筆者の行っている描画法の研究では、いわゆる非臨床研究を行って得られた描画と、臨床現場で来談者が描いた描画には連続性があり、健常群の描画から得られた知見はそのまま臨床群の描画にも適用可能であるということになる。このこと自体は、前提としては否定されるべきものではない。いくら臨床実践上の経験から、健常群の絵を見てなんと臨床現場で見る絵と異なることか、という印象を持ったとしても、それをもってして臨床現場での絵と健常者の調査での絵は質的に異なるという断定はすべきではないだろう。臨床家の印象をもって事実の記述として足るのであったら、そもそも研究などは必要ないということになる。しかし、実際にそのように臨床状況で描かれた絵と調査状況で描かれた絵が異なる印象を与えるということも事実である。

以上から、臨床群と健常群の絵に質的に差はないとはずという断定も、臨床群と健常群の絵は質的に異なる（から研究しても意味がないという）断定も同様に行うべきではないだろう。問題にすべきなのは、臨床群と健常群の描画が異なるとしたら、どこがどのように異なり、また連続しているのかということである。このような意味で、アナログ研究とは異なり少なくともそのある部分は非臨床群と臨床群の絵は質的に異なると仮定したとき、それでも非臨床群を研究する意味はあるだろうか。この問いには、人類学者が研究を行うときに、類人猿もその対象としていることが一つの

答えとなる。人類の特性を研究するときには人類と類縁だが人類でないものを研究することで、人類であることの特性が初めて明らかになるということと類似していると考えられる。臨床状況での描画の特性を研究するためには、臨床状況でない場面での特性も研究しなければ、臨床状況特有の現象を研究したかどうかを確認する術がないのである。このことから、ここでいう非臨床研究では、アナログ研究の発想とは違い、非臨床群に起こることは臨床群で起こることとは異なるからこそ意味がある、というふうに捉えることができる。

一方、非臨床群の描画が臨床群の描画と少しも重なるところがないのであれば、それは確かに臨床実践に関係しない研究になってしまうことになる。しかし、これらの描画が完全に異なるということもまた考えにくいのも確かである。描画法でいうと風景構成法や星と波テストなどの具体的な手順や道具が同様のものから生じる事象の結果が臨床群と非臨床群で少しも重ならないとは考えにくい。そこで、対象とする技法の中で、臨床現場で起こることのうち、何が臨床現場でしか起こり得ず、何が臨床現場でなくても技法の手順によって生じるのかということを検討することが重要になってくる。

佐々木（2005）ですでに言及していることだが、個々の臨床事例を詳細に研究できる臨床事例研究の価値は疑うべくもないが、そこからこぼれ落ちてしまうものも多々あることもまた否定できない。臨床場面は臨床場面として独立して存在しているために、研究のために有効な工夫を入れることができないこともその一つである。その工夫をいくつか挙げてみよう。まず考えられるのは、記録の問題である。風景構成法の研究においてはそのプロセスを研究することが決定的に重要であるが（皆藤，1994；佐々木，2012），そのためには映像記録をとることは不可欠である（佐々木，2007，2012）。これは映像が客観的なデータだから重要だというのではなく（映像もある固定した角度からしかフレーミングできない以上、純粋無

垢の客観性を標榜するわけにはいかない)、プロセスにはあまりにも多くの要素が含まれているために、その場での記憶だけでデータ化することはどのようにしてしても不可能だからである。映像記録を研究しようとしたことのある研究者は、映像はどのような視点から見るとかによって全く異なった側面を見せることに気づいているだろう。逆に言うと、映像に収められない限りその場面に含まれている多様な側面は収集不可能だということである。さて、話を臨床心理面接に戻すと、臨床心理面接の場で風景構成法が行われた場合（これは何も風景構成法のような描画法の研究に限るわけではなく、例えばそのときの気分をここぞというときに質問紙で記録に残すわけにはいかないだろう）、その記録に気をとられるわけには行かない。臨床心理面接の間は臨床心理面接のことを考えているのであって、どうやったら風景構成法を上手く記録できるかなどということは一瞬でも考えることはできない。つまり、相談内容の守秘という倫理的な問題だけでなく、記録ということに気が削がれることによって、肝心の臨床心理面接そのものに影響が出てしまうと考えられるのである。

もう一つの工夫は、研究の方法そのものを他分野の研究者との協働で行っていく可能性である。これについては実際の研究例を後に挙げるが、研究の立案、データ収集、分析まで、臨床心理学の分野以外の研究者とのコラボレーションにより、心理臨床家だけでは思いつかないような研究方法や心理臨床家の手には負えないようなデータ分析を導入することができる。これは臨床心理学における「実験」という枠組みだからこそ可能になるもので、心理臨床面接の実践の場において他分野の研究者の手を借りることは実際上不可能である。

このように、研究を行っていくための自由度の確保という意味で、非臨床研究を行うことには有効な意味があると考えられる。先にも述べたが、この自由度の下で得られた知見をどのように臨床の現場に還元していくかという問題がこれとは別に生じるが、これは心理臨床家の研究者としての

側面と、臨床家としての側面の両方が協働して考えていくべきことであって、直接的に臨床的場면을扱わないことそのものは研究という行為を進める上では阻害要因にはならないのである。

III 非臨床研究の例

ここで非臨床研究の例として筆者らの行った研究を挙げておくこととしよう。ここで採り上げるのは、風景構成法の描画場면을映像でデータ収集し、その描画プロセスの進行上に起こる描き手の身体の動きと見守り手に生じた描画場面の評価との関連を検討した研究である（長岡ほか、2013）。

この研究では、非臨床研究として研究のために被検者（＝描き手）を募集し、個別法で風景構成法を施行している。描画が行われたのは実際の心理臨床が行われている部屋ではないが、研究施設の中の実験室で、内装、調度は可能な限り実際に心理臨床面接が行われる面接室に近づけてある。この中で、論文の第二著者である筆者が見守り手として描画場面に入り、20人の描き手に対して風景構成法を行った。風景構成法は通常の施行手順にしたがって、準備段階としての会話の後、見守り手によるA4用紙への枠づけ、教示、描き手による10のアイテム（川、山、田、道、家、木、人、花、動物、石）の描画、付加物（描き足したくないもの、描き足りないもの）の描画、クレヨンによる彩色、そして描画を振り返っての話し合いである。また、風景構成法が終了した後は調査場面全体を振り返ってのインタビューも行っている。

この論文では、検討に用いた指標は大きく分けて2つある。まず1つ目は、見守り手による描画場面の事例評価である。見守り手は、それぞれの描き手との間の関係性の成立と、描き手の中でのイメージの賦活度について主観的に評価を行った。つまり、どの程度描き手との間に心理的なやりとりが生じたかについての評価と、描き手の中でイメージがどの程度生き生きと動いていたかについて、見守り手の立場から主観的に判断して評

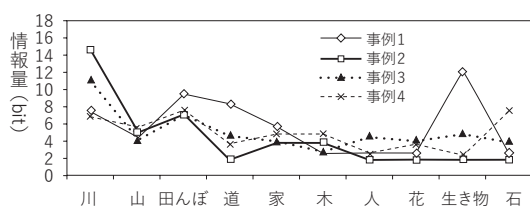


図1 「関係性がよく成立し、描き手の中でイメージが賦活した」群の特異性変動

定を行っているのである。この様相から、この20事例のうち17事例を6つのグループに群分けを行った。もう1つの指標は、描画プロセス中の描き手の身体の動作の様相である。この描画場面の映像記録から6名の評価者（見守り手の事例評価は聞かされていない）が、各アイテム描画終了から次のアイテム描画の間に描き手に生じた身体動作（「上体を起こす」「手を両膝の上に置く」など）をコーディングした。コードされた行動は、行動の生起・不生起の確率に基づく選択情報量としてその特異性が数値化された。この特異性は、各アイテムの後でその描き手の中での稀な行動が起きれば大きい値をとり、よく生じる行動が起きれば小さい値をとる。

その結果を示したのが図1および図2である。6群のうち、見守り手により「関係性がよく成立し、描き手の中でイメージが賦活した」と主観的に判断された群の行動の特異性の変動が図1で、「関係性が成立せず、描き手の中でのイメージも賦活しなかった」と判断された群の特異性変動が図2で示されている（他の群については元の論文を参照していただきたい）。図1の「関係性成立、イメージ賦活」の群は、描画プロセスの進行に従って、はじめ高かった特異性が一旦「山」で下がり、再び上がってから次第に下がってきて安定するという傾向がある。つまり、この群の描画場面では、描画プロセスが進むに従って描き手がアイテムを描き終わったときの動作が一定しているということがわかる。また、図2の「関係性不成立、イメージ非賦活」の群にはこのような

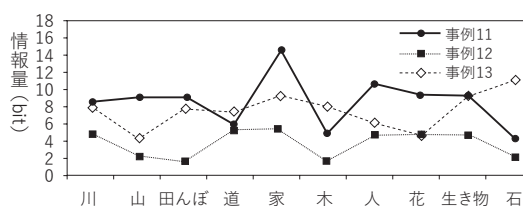


図2 「関係性が成立せず、描き手の中でのイメージも賦活しなかった」群の特異性変動

傾向は見られず、描画プロセスが進行してもアイテム終了後にはその都度異なった身体動作を行っていたということが言える。このことから、仮説として見守り手と描き手の関係性が成立し、描き手の中でイメージが賦活していると考えられる描き手は、求められたアイテムを描き終わったことを見守り手に明示的に示し、ターンを見守り手に譲ろうとするということが推測できる。詳細は省略するが、このことはこれらの描き手が具体的にに行った動作からも推測することができる。したがって、風景構成法のアイテムを描く10回のやりとりは、それが十分に成立すると、見守り手と描き手のいわば「呼吸合わせ」の機会として機能するということが推測できるのである。

ここに筆者らの行った研究の例を挙げたが、この研究で重要な役割を果たしているのは、風景構成法の施行そのものや事後インタビューとともに、映像の分析と見守り手の内省である。映像の取得は当然のことながらこのような「実験」状況でないで行なうことができない。そもそもこの研究は探索的に行われ、行動指標に注目したのもデータ収集を行った後のことである。視点の探索を行うために可能な限り描画場面全体を捉えようとしたため、カメラは4台（真上、真横、描き手向き、見守り手向き）設置して描画場面の設定を行っている。このようなデータ収集は「実験」場面でないと行うことができないだろう。また、見守り手の内省は臨床場面では必ず重要なものとして記録されるが、その指標として「関係性の成立」と「イメージの賦活」のように分化して言語

化し、それを指標化するようなことは臨床場面では行わない。むしろその臨床心理面接の流れ全体の中で風景構成法施行を位置づけることに意味があるのであり、研究のために風景構成法を単体として扱うのであれば臨床心理面接として本末転倒になってしまうだろう。

このようにして得られた、「風景構成法のプロセスが描き手と見守り手の呼吸合わせのプロセスである」可能性は、臨床家であればある程度納得のいく仮説になっているのではないだろうか。むしろ、「言われてみれば」臨床家としては当たり前のことといえるかもしれない。しかし、その当たり前前のこと、言語化し、指摘をされてみないことには、当たり前前だと思ってもできないのではないだろうか。この研究は第二著者（筆者）が臨床心理学研究者かつ心理臨床家で、第一著者と第三著者は認知科学の研究者であるが、そもそもの着眼点として「なぜ見守り手は描き手がアイテムを描き終わったことがわかるのか」ということを第一著者と第三著者に指摘されるまで、専門家のはずの第二著者＝本文の筆者は「当たり前すぎて」着眼することがなかった。このようにして得られた結論は、臨床場面で風景構成法を用いるときに、十分に役に立つものになっているのではないだろうか。

ここでは、非臨床場면을研究することで臨床場面に還元することのできる研究を行うことが可能であることの一例を示した。これ以外にも、佐々木（2007）、長岡ら（2011）、nagaoka et al.（2013）などがこのような研究の例として挙げることができるだろう。

IV 映像データについて

ここで、「実験」研究で有効だと考えられる映像データについても一度触れておこう。映像データを扱う際に注意しなければならないことを3つ挙げておく。

まず1つ目は、映像は現実そのものではないと

いうことである。指摘するまでもない当然のことと思われるかもしれないが、「カメラはカメラの撮れるものしか撮ることができない」。これは、一つはフレーミング、すなわち撮影角度の問題がある。これに対しては、カメラを複数台用意することである程度は解決できる。しかし、カメラを何十台用意したところで、その場の雰囲気といったような臨的に重要なものまで写りこむわけではない。撮影しているからといって安心せず、記録をカメラ任せにしないことが重要である。

2つ目に重要なのは、先にも指摘したが、一つの映像でも着眼点が異なれば全く違うものに見えるということである。言い換えると、着眼点が適切でなければ、映っているものも研究者の目に入ってくないということになる。このことについて、臨床心理学の研究ではないが、細馬ら（2014）を例にとって説明する。この研究（「人はアンドロイドとどのような相互行為を行うるか」）では、劇団青年団の公演である『アンドロイド版三人姉妹』の稽古の状況を研究対象とし、劇中に登場するアンドロイドと、（人間である）俳優との相互作用についての分析を行っている。この中では複数の分析が行われているが、その都度、ある場面やある登場人物に焦点を当てて分析を行っていることが明示されている。例えば分析1-2には「トランスクリプト1を、真理恵（登場人物：引用者注）の動作に注目してみると」、分析2では「さらに人称代名詞の問題として捉え直すべく」とあり、さらに分析3では「一方、発話連鎖に注目すると」と、それぞれの観点からの分析が行われていることがわかる。映像は静止画と違って時間的構造を持っているため、まず時間的にどの部分に着目するかという自由度があり、また着目する時間的な幅が決まった後もその二次元的な映像のどこに、あるいはどの登場人物に、またどのような観点に着目するかによって全く異なったものが見えてくるのである。このような多くの自由度がある映像を分析するにあたっては、漠然と映像を眺めて視点を発見するという方法だけでなく、

細馬らも使用しているような映像解析ソフトウェア（細馬らはELAN (Max Planck Institute) を使用している）を用いて、多視点からの分析を行うことが必要になるだろう。

3つ目に重要なのは、映像の分析には時間がかかるということである。これは文字通り映像の膨大な情報量を分析するのに手間ひまがかかるという意味と、映像をデータとして収集してから分析に手を付けられるようになるまでにはある一定の時間が経ち、映像が取り扱い可能な「対象」として成立するまでに時間的懸隔が必要であるという意味と2つの意味がある。人類学者である菅原(2010)は、映像の分析について、自らのデータの分析の過程で「ビデオの映像を見つめ始めたとき、自分が悪夢の世界に入り込んだような感覚に襲われた」と述べている。また、「凍結保存されている現実の似姿を目の当たりにすることは、観察者にある種の畏怖の念を起こさせる」とも書いている。菅原の同書には、データの収集から分析までそれぞれ17年、16年、19年の間隔があいているものが取められている（17年のものは映像データではないが）。これは、必ずしも映像による「悪夢の世界に入り込んだような感覚」や「ある種の畏怖の念」からのみ時間が必要だったとは書かれてはいないが、データの対象化にせよデータ分析に必要な理論的成熟にせよ、膨大な情報量を含んだデータを分析するには、それだけの心理的距離が必要だということなのではないだろうか。もちろん、一般的にデータは採ってからすぐに分析するに越したことはないだろうが、映像という莫大な情報量を含んだものの分析においては、むしろ時間が経ったからこそ見えてくるものもあるだろうし、そのためにはそのデータから何かを読み出し得るのだということを心理的に保ち続けることが必要になってくるのではないだろうか。

V 臨床心理学における「実験」を阻害するもの

話を臨床心理学の「実験」そのものに戻そう。ここで、この種の研究を行うことを阻害する最も大きな要因について述べておく。それは、この種の研究の開始段階、あるいは中途の段階で研究の「臨床的意義」について詰問を受けることである。このように問われることで、研究者は「現在やっている研究と臨床のつながりを即答せよ」と迫られる。

これまで述べてきたように、この種の研究は、おおまかに臨床への接続を指向しているとは言え、それが具体的にどのように臨床と接続しどのように臨床的に有意義であるのかは分析がある程度進んで解釈を行ってからでないと明示できないことが多い。Bateson (1972) が、自身の研究に関して「わたしが携わってきたような研究は、研究が進んだことの結果として、はじめて何を研究していたのかが分かるという手合いのものなのだろう」と言ったように、膨大な情報量を扱うことになる可能性のある研究はその臨床的意義や仮説については研究途中の段階でははっきりということができないことが多い。臨床心理学の研究に対して「臨床的意義」を問うということは、臨床的意義のない単なる研究のための研究を批判する真摯な言葉として有効だった時代もあるかもしれないが、この現代（2010年代）においては、現在持っている問題意識では捉え切れないものを捉えるために研究を行おうとする勇氣ある（多くは若い）研究者を萎縮させるものとして機能してしまう。研究の検討の場でも論文査読の場でも、ある研究に対して臨床的意義を問うてみたくなかった人には、それが単なる習慣的発言ではないか、開きかけた新しい研究の芽を無造作に摘むことになっていないかどうか一度考えてみることをお薦めしたい。

もう一つ問題なのは、仮にある研究が臨床に役

立たなかったとして、それは臨床に役に立たない研究を行った研究者の責任なのか、それとも研究を臨床に役立てられない臨床家の責任なのかの線引きはかなり難しい、ということである。優れた臨床家は全くの他分野、例えばスポーツや将棋などの勝負事や、美術、音楽、映像、文学などの芸術などからも自分の臨床へのヒントを見つけてくるものである。臨床家次第で全ての研究から意味があることを読み出し得ると主張したいわけではないし、実際にこの現在においても自己目的的な研究のための研究が多数存在していることも否定はしないが、上記のことを考えれば、一見直接臨床に接続しないような研究も何らかの点で臨床に結びつかないかを積極的に考える姿勢が研究の読み手としての臨床家には必要なのではないだろうか。

VI 「実験」を活かすために

最後にまとめとして、臨床心理学での「実験」研究を行う研究者に必要な構えについて述べておく。「実験」研究、非臨床研究を行う研究者として必要なことは、自身が行っている研究の条件が必ずしも臨床現場で起きることとは一致しているとは限らない、むしろ異なっていることの方が多くを明瞭に自覚することである。そして、臨床現場とは異なる対象を研究しているということを強く意識することで、その研究がどのように臨床と類似し、あるいは相違し、またどのように臨床に接続可能かを考えながら研究を行うという姿勢が重要なのではないかとと思われる。このことは、実際の臨床現場と「異なる」と意識すること

でより強く考えることができる。臨床場面と異なるからこそ手が届く事象を研究することで、臨床場面を研究することだけでは得られない知見を得、それを臨床に還元するという姿勢が、非臨床研究あるいは「実験」を行う必然性の根拠となるのである。

▶ 文献

- Bateson G (1972) Step to an Ecology of Mind : Collected Essays in Anthropology, Psychiatry, Evolution and Epistemology. University of Chicago Press. (佐藤良明 訳 (2000) 精神の生態学 改訂第2版. 新思案社)
- 細馬宏通, 坊農真弓, 石黒浩, 平田オリザ (2014) 人はアンドロイドとどのような相互行為をいうか——アンドロイド演劇『三人姉妹』のマルチモーダル分析. 人工知能学会論文誌 29-1 ; 60-68.
- 皆藤 章 (1994) 風景構成法——その基礎と実践. 誠信書房.
- 長岡千賀, 小森政嗣, 桑原知子, 吉川左紀子, 大山泰宏, 渡部 幹, 畑中千紘 (2011) 心理臨床初回面接の進行——非言語行動と発話の臨床的意味の分析を通じた予備的研究. 社会言語科学 14-9 ; 188-197.
- 長岡千賀, 佐々木玲仁, 小森政嗣, 金 文子, 石丸綾子 (2013) 行動指標を用いた心理臨床の関係性に関する定量的検討——描画法施行場面を題材として. 対人社会心理学研究 13 ; 31-40.
- Nagaoka C, Yoshikawa S, Kuwabara T, Oyama Y, Watabe M, Hatanaka C & Komori M (2013) A comparison of experienced counsellors, novice counsellors and non-counsellors in memory of client-presented information during therapeutic interviews. *Psychologia : An International Journal of Psychological Sciences* 56 ; 154-165.
- 佐々木玲仁 (2005) 風景構成法研究の方法論について. 心理臨床学研究 23-1 ; 33-43.
- 佐々木玲仁 (2007) 風景構成法に顕れる描き手の内的なテーマ——その機序と読み取りについて. 心理臨床学研究 25-4 ; 431-443.
- 佐々木玲仁 (2012) 風景構成法のしくみ——心理臨床の実践知をこぼにする. 創元社.
- 菅原和孝 (2010) ことばと身体——「言語の手前」の人類学. 講談社.
- 杉浦義典 (2009) アナログ研究の方法 (臨床心理学研究法 第4巻). 新曜社.